

1338

正訂

161
654

宮川經輝氏演說筆記

基督教と忠君愛國

附 神儒佛に對する意見

020483-000-4

特16-462

基督教の忠君愛國 附，神儒仏に対する意見

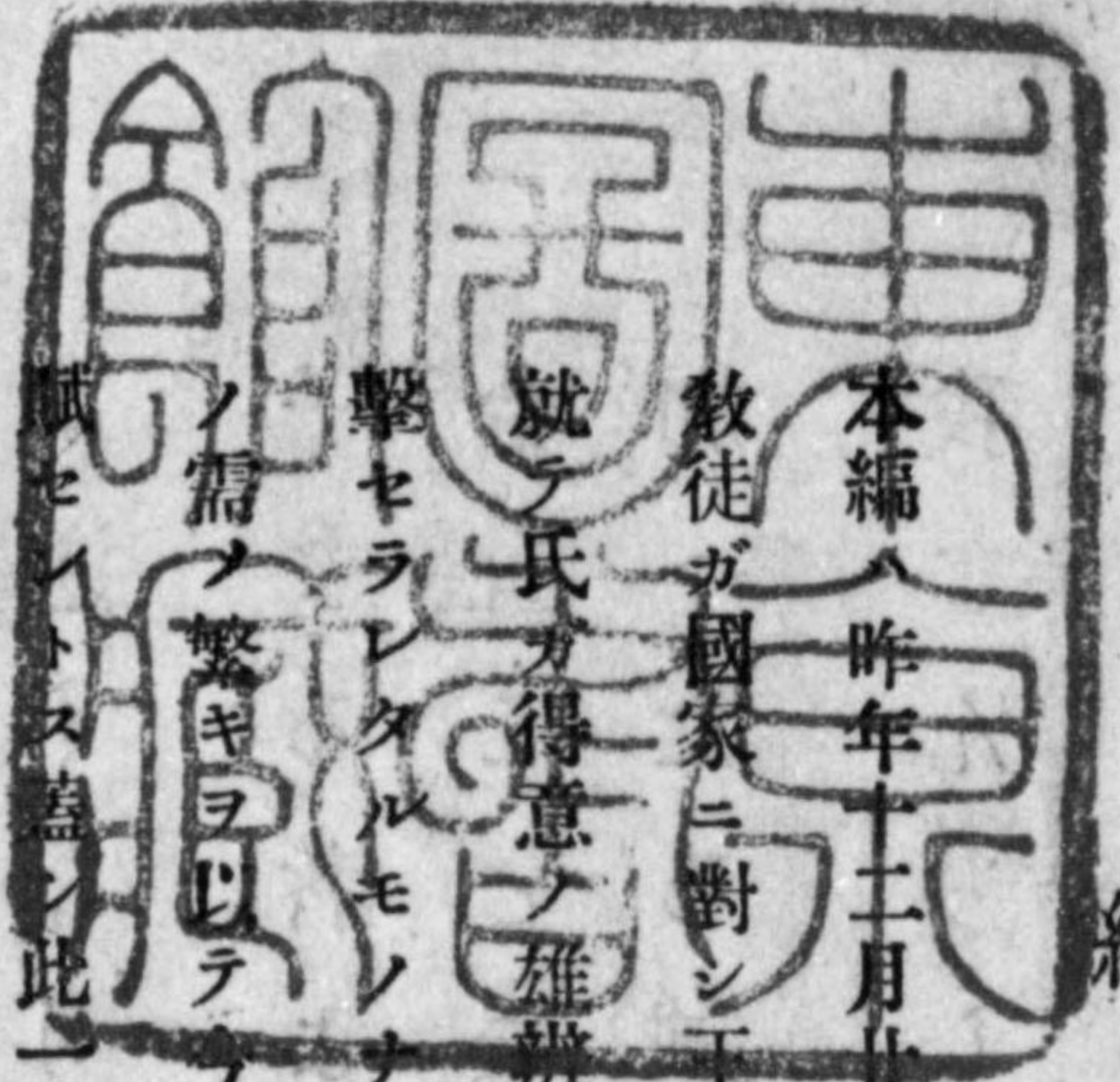
宮川 經輝/述

M26

ABI-0293



緒言



本編ハ昨年十二月廿一日宮川經輝氏ガ岡山基督教會堂ニ於テ演說セラレシ筆記ニシテ基督教
 教徒ガ國家ニ對シ王室ニ對シ又々神儒佛ノ三教ニ對シテ抱持セル意見ト基督教ノ本領ニ
 就テ氏ガ得意ノ雄辯ヲ奮ヒ滔々論述シ來リ基督教ニ對スル世人ノ誤解ト俗論トヲ辨難攻
 撃セラレタルモノナリ曩キニ此レヲ印刷ニ付シ同好ノ士ニ頒チシガ幸ヒ時好ニ適ヒ讀者
 ノ需ヲ繁キヲ以テ一回更ラニ演者ノ校閱ヲ經テ充分ノ訂正ヲ加ヘ再版ニ附シ弘ク世ニ頒
 賦セントス蓋シ此ノ小冊讀者ノ心ニ基督教ノ本領ヲ紹介スルニ足ルベシ但恐ル該筆記ハ

速記法ニ憑ラサルヲ以テ充分演者ノ言詞ヲ盡サザル處多カラシ讀者請フ之レヲ諒恕セラ

レヨ

明治廿六年三月

筆記記者謹識

聖語

上に在て權を有る者に凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡そ有るところの權は神に立たまふ所なれば也是故に權は悖ふ者は神に定ま逆くなり(羅馬書十三章一、二)

子なる者よ爾曹主にありて両親に従ふ可し是合宜ことなれば也爾れ父母を敬ふ可し約束を加へたる誠は之を首とす(以弗所書六章一、二)

我なんぢらを愛する如く爾曹も亦たがひよ愛すべし是わが誠なり人をれ友れためよ己の命を損ふは此より大なる愛はなり(約十五章十二、十三)

基督教ト國家的問題及在來ノ宗教ニ對スル
思想ヲ述テ遂ニ基督教ノ本領ニ及ブ

宮川經輝君



宮川經輝氏演說筆記

今晚は「基督教と倫理」なる題を以て御話し致す積りで有りましたが、都合によりて、此の題をも意味して述ぶるも、更に題を改めて「基督教と國家的問題及在來の宗教に對する思想を述べて遂に基督教の本領に及ぶ」と云ふ題を以て陳述せんと思ひます。演題を見れば非常に長いやらなれども、左程長くは陳べぬ積りであります。

世の中は感情はとあるべきものは無い、理屈の判らぬとなれば道を立て理を別けて話せば合点が行く、然れども若しも其の感情を害ふたなれば、何程道理が判て居ても、ど一も心の底に何か一種のわだかまりが有りて解けるとなく、是れが爲めに闘る可からざる大害を來すものであります。古來我邦に於て國の爲めに倒れたる人は澤山ありて數へ擧る事が出来ない程であります。是等の人々は道理の爲めに殺されたかど云ふに決してさうで無い、大概一種の感情の爲めに殺されたものである、彼の大村益次郎の如き、横井小楠

の如き、又た佐久馬象山の如き、大久保利通の如き、何が彼等を殺したかと云へば、即ち一種の間違つた感情の爲めに殺されたもので決して道理の爲めに死したのではありませぬ。

今耶蘇教に對しても國民の心を見れば如何程道理に於ては判つて居ても、何か一種の感情の爲めに制せられて之れを卻くる有様である。今晚諸君に向て基督教に付き學說を以て論辨するも、道理を以て説明するも諸君は是れは理屈である表面を飾る爲めの議論であると云はるゝならん。故に今晚は學說に付ては論ずることを止め、私が數年來心に思ふて未だ口に出さなかつたことを持ち出して、藏さず臆せず、正直に諸君の前に打ち出して見ようと思ふ、夫れで或ひは諸君の心の底に落ちぬことを云ふかも知れぬが、充分私の思ふて居るとをお話し致す積りであるから、少しの間靜聽あらんとを望む。

私は人々が耶蘇教は國を賣るものであるとの思想を有するのを聞きました、此の感情は何處から來たかと云ふに、今を距ると三百余年前豊臣秀吉の時代より少しづつ保たれた、否な是れよりも一步溯つて織田信長の時代に起因せしものと思われる。此の時代に於て

は、和蘭と西班牙の二國が日本に來りて貿易をなし、西班牙の如きは天主教の教師を送り盛に傳道に従事し、遂に九重の都にも南蠻寺なるものを建築するに至り漸次勢力を得ましむ。當時此の二國は歐洲に於て商賣敵きであつて、何れの國に行くも、互ひに其の自國に商權を得んとを務めて居りし、其極遂に他を陥れて已れ自から之れに代らんとするに至つた。和蘭は西班牙が日本に於て斯くも勢力を有するを見るにつけ如何にもして其の勢力を殺ぎたいと伺ふて居りましたが此際西班牙人が盛んに耶蘇教を擴め居るを見て此れ幸ひのとなりとて和蘭人は日本に向て「御用心なさい西班牙人は野心を抱て居る耶蘇教を貴國內に布き廣めたる以上は必らず軍艦を港々へ差し向けて只だ一戦に打ち破り貴國を取ると云ふ恐ろしひ工みがありますぞ………」此言は織田氏の時代には少しも云はなんだが、豊臣氏の時には一寸云ひ出し遂に徳川家康の時代に及んで一層熱心に日本に向て注意を促した。是に於てか徳川政府は大ひに恐れ一刻も早く耶蘇教徒を追ひ出すとに力を盡すに至つた、此れが其の原因である。然れども今日より是を考ふれば實に西班牙は去る野心を有た譯ではなくして時の政府只だ和蘭の政略に甘く惑はされて遂に

此に至りしものである。近時魯西亞より「ニコライ」を遣はして耶蘇教を傳へしめたが其時の人々の中には「ニコライ」が天皇陛下の寫眞を踏だとか或は彼は國を取るの野心ありとか種々なる俗論を起したが此れ亦た惑へるもので「ニコライ」は決して國を奪ふの精神もなく又た天皇陛下の寫眞を踏むなどの暴行をしたものとは思はれない。今や新教は盛んに傳へられ、益々傳道に盡力せらるゝことであるが、其の傳道の費用は如何なる處から出るかと云ふに、實に彼の國信者が粒々辛苦によりて造り出せる金銭で有つて、決して政府は之れを對して少しの關係をも有して居りませぬ。

此事は偕て置き吾人基督教徒は我が日本の國を如何に考へて居るかと云ふに私は最も、我國を愛す我國を措て他に最も愛す可きの美國なしと云ふとは萬國の人々に向て公言して少しも憚からざる處である。請ふ眼を放つて日本の山水を見よ、其の風光の明媚なる全世界中端西か日本か、此の他に二つと無い。偕て氣候はど一かと云ふに、暑からず寒からず最も文明の進歩に適して居る。又た地勢より云へば四方は海に取まられ佳港良灣其數を知らず、此くの如きは佛蘭西などとは決して見るとが出来ぬ、否な實に歐州各國

の有せざる良港を有し將來商賣の中心となる可き地勢は見へて居る。又た人民は南の極より北の極に至るまで皆な同一の人種より成立つ尤も二三の人種の混淆よりなると云ふ説もあれど概言すれば先づ同一人種と云ふて可なり。偕て言語は如何……鹿兒島人と奥州人と相會せば通せざる事もあらん、然れども當時小學校の設け都鄙に沿く、此の學校の在る土地は凡て同一の言語を使用すると云ふても宜し、亞米利加の如きは獨逸語を使ふあり、伊太利語を使ふあり、西班牙語もあり、英語もあり、其他何々と種々の言語を使用して一定ならざるも、日本に於ては獨だ一の日本語なるものが全國に行なはれて居る此の如き國は世界に於て余り見ることが出来ぬ、偕て地味はど一か揚子江と黄河の間に在る支那内地の地味には或ひは劣らん「ガンヤス」河畔に比すれば或ひは勝らざらん、然れども和蘭獨乙、其他の諸國に比すれば大ひに勝れりと云ふも差支へなしと考ふ。吾々は此の如き美國を愛せずして可ならんや、耶蘇教の聖書を讀むに愛國の美風の存するを見る特に舊約書の如き言々句々其の國の爲めに盡さんとを記するにわらずや、實に基督教の極意を得たるものよして、此國を守り、此國を愛し、進んで此國を東洋の一大文明

宮川輝氏演說筆記

國と爲さんことを熱望せざるものは一人もありません。以上は國家的問題の愛國の点よりして申したることにして耶蘇教徒が國に對しての思想を述べたのである」

偕て王室に對しての關係は如何であるか。耶蘇教を信するなれば共和政治をやるかも知れぬ、耶蘇教は中等主義を旨として居る故に、王室も自己も一つと云ふ考へを起し終には王室を尊崇せぬ様になるではないか。是れ實に托憂である。何となれば成る程亞米利加、佛蘭西、端西等の如きは共和政治を取て居る又は相違ない、然れども英吉利、獨乙、埃太利亞、白義、西班牙、魯西亞等は如何であるか、或は立憲國もあり專制國もある、耶蘇教を信する國にして共和政治を取らざるもの頗る多し、一方に五六の共和國あれば、一方には十有余の君主政治國あり、特に英吉利や獨乙の如きは實に此の好適例である。偕て聖書には如何書いてあるか、舊約書には「王を立てて是れを尊とめ」と云ふ又た新約書にても羅馬書十三章を熟讀せられよ、「上に在りて權を掌とるものに凡て人々従ふ可し」と又彼得の書にも王を尊ぶ可しと云ふ言を見る。特に我が豊原の端穗の國を考ふれば、神武天皇が始めて即位せられしより二千有余年の間、同一の皇統連綿として替ることなく、

宮川輝氏演說筆記

歴代の天皇の中には寒夜に貧人の凍へんことを慮かり給ふて御衣を脱がせ玉ひしあり、或ひは庶民の粗食を試んど欲して粟の供御を食し給ひしことあり、又た今日の王室は如何と云ふに、岐阜縣の震災あれば直ちに特使を遣はして慰問せしめ、各地に洪水の害に遇ふものあれば復た直ちに侍従を派して其狀を聽き給ふ、陛下が蒼生を憐み玉ふの深さを思へば其の恩澤は實に極まりなし故に古來我國の王室と人民との間は實に圓滑にて決して大なる争を起したることなき。英吉利、獨乙、何れの國の歴史を繙くも、斯の如き關係を有する國を發見することが出来ぬ。以上の有様なるを以て、吾人基督教徒は成る程權義の上に於ては平等を唱へることはあるも、一切萬事皆平等ありと云ふものにあらず、故に吾人は王室に萬一の事がある時は進んで忠誠を盡すの決心を有して居る。嘗て一人の紳士が來たりて私に向て云ふには「せーか基督教と王室の關係を明らかにしてもらいたい、王室に對して尊敬を表するおとを信徒一般に進めて貰ひたい」と。お言葉迄もありません、是れに付ては年來之れを口にするのみならず、實地に是れを行なひつゝ有りますと答へしに、紳士は涕を流し喜んで去られました。三万の耶蘇教信者の中には、歴

宮川輝氏演說筆記

史を知れるものもあり、政治の何たるを解するものもありません、故に王室と人民の關係は如何なるものなるやをも知て居ります、王室は仁政の源となり、國民は王室と云へば仁徳の存する處にして渴したる時には行き其の恵みの泉を呑むことを得る様になしたる、私は此のことを務めんが爲めに人々に遇ふ毎に常に口を極めて此の事を云ふて居ります。

耶蘇教が擴まらば佛教との衝突を生せないか、萬一佛教と耶蘇教と劇しき衝突を起したるんには大争動であると氣遣ふ人もありましよう。諸君の中には佛教信者も居られると思ふが、私の考ふる處によれば、佛教の中には哲學の幽深深遠なる妙味がある、佛教の中には「アリストートル」の三段論法と肩を并ぶべき四段論法あることを認めます、故に之れを哲學論理學として見るときは、僧徒は如何に失敗しても、學者の坐右に一切經は備へらるべきものである、一切經は實に學者の重寶であると考へる。然れども今日の寺院や佛像に對しては如何なる考へを有つかと云へば、私は答へて諸君が見らるゝ通りなりと云ひます。

宮川輝氏演說筆記

私は一昨年の夏紀州の粉河寺に於て澤山の佛像を見ました、其中に一枚の札を貼付て居るを見て近附て之れを讀めば、寶物取調局長九鬼隆一君巡迴の際優等の美術品に列せられたり、と筆太に記しあり(聽衆笑ふ)と一も不思議だ、此の様な貼札をして供養して居るのは、如何なる意であるかと考へた事あり。又た關西貿易會社に行きましたに、澤山なる陶器漆器等其他種々の美術品を陳列してある、其中に又た多くの佛像を一處に列べてある、私は是は何にするかと問ひましたに、之れは賣物にするのである、西洋人が來て見て價を定めて購求するのであると答へました。此頃西洋から歸つた人の談話に、「エール」大學の博物館には日本の佛像が澤山列べてある、此事は十万の僧侶は知らぬかと云ふに知て居るのであると思ふ、又た其の多くの佛像は俗人の手に在りしものが賣られて行きかど云ふにそで無い、現に寺院の本堂に安置せられて供禮を受けた處の本尊様が僧徒の懷中が寒くなつた爲に、可憐に數千里外に賣られて店頭に列せらるゝとは(聽衆大笑)私は實に日本美術の爲めに惜む。嘗て東京の美術館に於て佛像を見て居ましたに(私は性來大いに彫像などを好みます夫れ故へ何處に行ても先づ斯様なものに目を着け

ます一人の朋友が来て見よと云ふから其一個の佛像を見ましたに、其眉目は實に沈思の真相を表し、其良は實に無量の思想をたゞ居るを見て、私は斯くも日本古代の美術は進歩して居つたかと驚きました……此の精巧異妙なる美術品を海外に輸出して是を失ふことは私の大に惜む處であります、若し世に佛像保存會と云ふ様を設がければ私は第一番に此會に加入せんと思ふ。

又た京都智恩院の山門或は千疊敷の方丈の如きは實に日本建築の美を表彰するものである、又た奈良の方隆寺の如きも、千有余年の古寺にして最も貴重すべきものである。然るに茲に悲む可きは十万の僧侶中には漸々貧乏になる者もあると見えて、身代限りを爲るを度々聞きます、嗚呼此の通りなれば彼の壯觀偉麗なる建築物は如何になり行くか是を思へば實に悲む可き有様である、若し佛教者が貧乏して賣らねばならぬ様に至らば成る可く日本の中に是を取り留めたい、外國へ取られ度く無い。米國邊の商人等は奇なることを好む故へ、「ピラミット」を買ひ來りて國の中央に立つることを爲す可し、智恩院の山門の如きも、五万圓や十萬圓……幾許費用が要ても之れを輸送して、桑港金門

の邊に立てる位の計畫は容易い事である……私は佛寺保存會を設け度い、勿論澤山ある小さい寺院は惜まない只だ此の美術建築の好標本がいつか西洋人の物となるを悲むのである。

或ひは云はん、左様なものはどこでも宜ひ佛像が海外に行ても佛寺が頽廢しても佛教の關ふ處でない、佛教の本領は安心立命である。私は是を聞いて拍手して賛成します。然るに十万の僧侶は果して此言を躬行實踐して居るか又た佛教自己が夫れ丈けの價値を有するか……私は哲學として論理學としては第一に是れを取る然れども所謂安心立命に至りては手際が覺束ないども安心が出来ぬ吾々耶蘇教信者は傳教日淺く力未だ足らず勢未だ微なりと雖ども充分我が手に引き受けて國民救済の大義に當り安心立命の大道を宣傳せんと思ひます私が斯く云はば諸君は彼は無責任の語を吐くものであると笑ふならんが五十年百年後の歴史家が如何に吾人を評するか私は茲に此事を廣言して置て少しも憚からぬ諸君は數年の後に於て果して私の言の當れるや否やを知るを得べし。

神道は如何之れには王室と縁が近いから、迂濶に云ふとは出来ぬ。其れ故へ此れ迄余程扣

宮川輝氏演說筆記

へて居た、然れども今晚は凡て云て終はんと思ふ。嘗てある神道家が名論を吐きしとあり、此人のみならず大學の某教授も嘗て之を論じた、即ち神道は宗教に、ならず、王室の御先代を祭り、國家に功勞ありし人を祭るので、之を功德記念碑と云ふてもよしと。私は之を聞いて少しも異議なし賛成であります私は嘗て伊勢に詣りて彼の五十鈴川上水清き處に神杉の鬱蒼たるを見て何と無く一種嚴肅の思ひをした。今や神苑會なるもの起りて之れを保存するに盡力せり私は是も賛成である、若し出雲の大神にも斯の如き神杉があらば、又一の神苑會を起すも妨なしと思ふ。此頃大坂にて小楠公の社祠を建築するを計畫して居る、其社祠は何を以て造るのと云へば無節の檜を以てすと、私は云ふ未可なり、假令節無の檜でも火に遇ふたなら焼土に歸せん、夫れよりも石にて祠を造るべし、否な尙は進んで此程九段坂上に建築せられたる大村益次郎氏の銅像の如く、又た宮城門外に建設せんと企てつゝある西郷隆盛翁の銅像の如く、小楠公が……敵の大將は誰ぞ……高師直、今日彼れの首を奪はずんば吾頭を彼に授けんと悍馬に鞭うつて群がる敵の陣中に懸け入りて勇戦したる其馬上の状態を形造り是を飯森山の麓に立て、公の誕生日か戦没の

宮川輝氏演說筆記

日に在大坂の中學師範學校其他小學校等諸般の學生を集めて一人の演說者が其銅像の前に立て、公の幼時彼の櫻井驛に於て涙を振て父に別れ一處より河内に歸り父の戦没を聞いて悲哀の餘り自殺せんとして母に止せられし事、或ひは其后感憤して遊戯の中にも戦争の眞似をなす、足利氏を破るなり、足利氏を降すなり、或は是れ國賊の頭なり是れ尊氏の首なりと、常々斯くの如きとにのみ目を送りし事、夫れより二十余の歳となり、朝より内侍を賜はりたる時に、「トテモ世ニ生存フベクモアラヌ身ノ假ノ契ヲイカデムスバ」と詠じたるが如き、又た彼の如意輪堂の門扇に箒を以て彫付けたる「カエラジト豫テ思ヘバ梓弓ナキカズニ入ル名ヲゾ止ムル」の一首を残して打立ちし如き、終に忠義の爲めに四條細手に敢なき最期を遂げし事等を演說せば、此の幾多の青年少年に愛國忠君の心志を發揮せしむると果して幾何ぞや。現に米國にても、華盛頓の誕生日には合衆國全体業を休み、其の功蹟を稱揚して居る。又た「ガーフィールド」の如き、英國の「チルソンの如き、「ウエリントン」の如き、皆な夫々記念碑を建設し依て以て彼等が功勞を表彰するど共に一方には大ひに愛國の士風を鼓舞して居る。日本在來の習慣の如く其祭典は決

い、神官などに一任して置いては、いけぬ。神道に對する意見畧ぼ斯の如し。儒道に對しては如何。私の書齋に來り見よ、論語は實に高き位置に据られて居る、私は論語中の名句を抜粹して常に之を誦せり。人倫の道に於ては、羅馬の如き希臘の如き何れの國に至りて求むるも、實に孔夫子の如く能く論述したる人は有りません。父子有親、よろしい、君臣有義、同意です、長幼有序、無論です、朋友有信、結構です、皆不同意はありません。只た一つの同意を表するものが出来ぬものがある「天子十二人、諸候九人、太夫四人、士二人」と云ふとがある、即ち一夫多妻を許す言である、此には不同意を表せざるを得ず。抑も人倫の基本は何かと云へば一夫一婦清潔なる生活である今日日本支那等の家庭の乱れて居るのは實に此の一夫多妻に原因せりと斷言なします。嘗て東京の或る友人が私に語りしとが有ります實に悲む可き事柄である、某貴顯が十六歳になる吾が子を制馭する事が出来ぬ、と一しても勉強せず怠惰で仕方がない。一日父は其の妻君と一人の婦人のある處で其子を呼び勉強せよ、勉強せざれば馬鹿になる、何故汝は勉強せぬかと責たけれども子は一言も答辨を爲さる故父は大いに怒りました、母も口を副へて故が有れば申

せと勧めましたそこで其子の答へに見は英俊になると嫌だ、勉強すれば英俊になる、英俊になるのがと一しても嫌だ、何故となれば、ゑらいものになれば京都邊から藝妓などを誘て來て、爲に一家の風波を生ずる様な事を爲なければならぬ故にと云ひました。……然るに其傍にありし女は三十日程以前に京都から連れて來た妾であつた玆に於て母は實に穴にでも入り度き心地をした、父も大ひに赤面したと云ふ。斯の如き家庭に於てと一して清潔なる家風が行なはるか、如何にして勉強なる子女を出すか出来るか、實に悲む可き事である、私は思ふ日本が此の制を捨てない内は、未だ以て真正の文明國と云ふとが出来ぬ(拍手喝采)故新島氏存命中條約改正の議論大に歩を進めける折しも氏は當時の外務大臣某に至り、如何に對等條約と申しても、日本は於て一夫多妻の公行せる間は、申すもお氣の毒なれども西洋人は人間の様に思ふて呉れぬ。故に若し對等條約を望まば先づ一夫多妻を廢せよと述べて歸つた、其後大臣は幕僚に向て話した、乃公は長州の役及び其他維新の際數々處の戰場に望み生瘡を受たとは度々で有たが、今日新島が來て話した言を聞いた時には、生瘡を受けた時より一層痛みを感じたと(此時笑聲起る)

いや笑ふ處ではない溜々たる天下實に斯の如し。文部省が如何に汗を流して教科書を書き、文部省内の官吏に惡風ある以上は決して善美なる教育を施す事が出来ぬ、大中小の學校教員が徳風修まらず或ひは校中の醜聞を世に流す中は決して其美風を養ふ事が出来ぬ。仁義禮智忠信孝悌、是れ等の事に就ては聖人たり夫子たり文宣王の名に愧ぢざるも一夫多妻の論に於ては孔子も失敗をなされた（ヒヤ々々）其点に就ては耶蘇教が如何に清潔なるかは充分確信する處である夫れ故に之れに就ては粉骨碎身して充分力を盡すつもりで有ります。

此頃傳ふる處によれば、政府は明らかに信教の自由を許したるにも關はず、尙ほ小學校の教員等が政府が基督教に反對の政畧を取れる様に考へて居るものが有ると聞く、是れ元より誤解であるが、兎に角日本政府が明治の初より宗教に就て如何なる事をなせしかと云ふに、先づ神祇官を廢し、次に太政官に改ため、漸次改正して今日は内務省に社寺局なるものを設けて之れに代ふるに至り。明治の初年全權大使が始めて西洋諸國に使はされたが、其の少し前であつた、政府は外教の蔓延を懼れ天主教を信するものを悉く縛

りて、各藩にお預けになりしとは諸君の知らるゝ處で有りましたやう、嘗て勝安房氏を訪ふた時に申された、彼の時には政府も實に困つた、何でも始末を付る事が出来ぬで余の處へ相談に來た、余は之に答へて、お止めなさい何の宗教でも勝手に信じます様にしたらば、争動も困難も無くなるからと申しました、茲お於て外教信者解放令が出たる譯である。又全權大使が亞米利加に行かれどきに、亞米利加の政府は大使に向て、貴國に於ては文明諸國と交際して居るに、貴國の町々に高札あり其中にキリシタン邪宗門の義は確く禁制の事とあり、是れ實に卑屈なるとして全盟國の交誼を破るものである、是に於て副使二人歸朝して此高札を取り下した、其時に政府は我國人民は數百年來此制札を熟讀して能く記憶して居る故に之れを据え置くの必要がないと云ふを以て取り下した、而して各國に向ては明か又切支丹排卻論を取り消したものであつて、云は、時の政府は二枚の舌を使ふたものである、（拍手）併し兎に角禁制の事丈は之れにて取消しとなつた。時世漸々變遷して明治二十二年に憲法を發布せられた、其第二十八條「日本臣民は安寧秩序を妨げず及び臣民たるの義務を背かざる限に於ては信教の自由を有す」とあ

宮川輝氏演說筆記

り。彼の憲法發布の時先づ第一に外國に達した電報は、實は日本の憲法は信教の自由を許したと云ふ語であつたそうす、此の一語が何よりも先きよ外國人が耳よし得た事である、斯る明文あり斯る事柄なるも關はらず、何處から命令が下りしものか、師範學校中學校の如きは尙ほ耶蘇教排卻主義を取て一步も動かぬものゝ如し、實は合点が行かぬ次第である。遂に之が爲め發して教員の免職となり、入學者の謝絶となる、成る程聞て見れば表は耶蘇教を信せし爲め免職謝絶せられたのではないと云ふて居るも、之れが原因であつた事は明か判る、本年の如きは遂に發して熊本縣山鹿に於て小學校生徒が耶蘇教を奉ずるの故を以て退校を命せられたり是に於て在京の教師等が内務大臣及文部大臣の許に至りて談判せしと及び其結果は諸君の己に御存じの事と思ふ。信教の自由は臣民の權利にして内務大臣文部大臣に於て少しも關係せず信せざるは勝手である。然らば此れ答を世に公開しても宜きや。宜しひ差支なしと遂に天下に此事を公けにした斯の如き明白なる理由あるとは充分判つて居るも、尙ほ一種の感情の爲めに制せられて其理を枉ぐるに至るは、實に悲む可きの至りです。

宮川輝氏演說筆記

私は已に以上愛國の点より、又た王室との關係、神儒佛の宗教に對し、當時の政府に對して陳述せり、是を以て見れば耶蘇教が日本に擴まるとも是れが爲め少しも差支を生ずるが如き事は決してありませぬ。最早や是れにて壇を退く可きか、否々今ま一つ云はねば此處を去るとが出来ぬ、凡そ國民には何にか確信する所なかるべからず確信は宗教の最大根基なるのみならず何人よても此確信なるものを有せねばならぬ、彼の支那の文天祥の如き其悲愴慷慨の氣風あると共に確乎たる信仰を有して居た事は彼の正氣の歌を讀みても判る、又た文天祥の言語に「吾立君以存宗廟存一日則盡一日臣子之責」等の如きは實に私共の心膽を貫ぬけり（聽衆肅然覺へず襟を正す）彼は實に一の信仰を有して居た何の信仰か今は賊党はびこり國家紛乱せるも正義は決して敗するものに非ずいつか勝を制して遂に賊党を亡ぼすの時あるべしと此の信仰を確く持して居つた。蜀漢の諸葛孔明が出師之表を見ても、孔明が確然たる信仰を有することを見るに足る「至於成敗利鈍非三臣之明所不能逆觀也」此一句によりても、彼が天の命を重んじ、其成敗利鈍によりて志を動かさざりしを見るも余りあり。源賴朝覇府を開いてより七百年間連續したのは

宮川輝氏演說筆記

何の力ぞ、元の忽必烈が海を被ふて攻め來りし時只だ一戰に打ち破り芳名を竹帛に留めたるは何よよるか實に當時日本の武門武士が主として大なる動作を爲せるよよる、此働さや即ち一片正義の心所謂日本魂なるものありて存せるが故である。今や文天祥、陸秀、葛武侯去り日本の士風は頹廢し、無氣無力正義は地を掃つて去んとする今日に於て是の一片の義心を喚發するを務むると最も必要と思ふ。

帝國司法部内に於て或る感情の爲め其同僚を傷つけんとせし者ありと、私は實に悲し、下等社會の婦女等が上海、香港、西比利亞等へ密航するものは何の辨へなき賤女子の事なり實に愧づ可きとでは有るが是れ尙ほ忍ぶことが出来る、司法の大權を有し最上の法權を掌握する最大最高の紳縉方が何の必要あつて花合せをするか、金は賭けたのではあるまい、……自分等か左様云ふから……金は賭けたのでは無いにしても何の必要あつて藝妓を對手として花合せを弄したか……昔なれば九寸五分を腹へ突立てるのが當然である、今日は左様な事は無きも其の徳義の頹廢せるの極は悲む可き事ではありませんか（喝采）又た今日青年社會に於ては如何是れを思へば實に非常の感慨を起す維新前後の漢

宮川輝氏演說筆記

學先生は如何と云ふ、只だ四書五經の講義が出来る位のもので、別に學問の有つた人は少ないと思ふ、然れども吾人が先生の前に出る時は袴を着て嚴然として其講義を聴き其言葉は一々心の底に納め其の言よりも第一風教を感化せられた。今日の有様は如何、先生は學問の切賣をなし、書生は授業料を出して之を買ふと云ふ有様ではないか師弟の間は實に斯様な次第である實に慨歎堪へない。

吾人耶蘇教信者は諸君が嗚呼がましひと云ふかも知れぬが、彼の屢々ユダヤの野に出で「アハブ」「ヘロデ」等の王を打ちし預言者の精神を養ひ充分力を盡し度いと思ふ。基督が嗚呼禍なるかな學者と「パリサイ」の人よ汝等は白く塗りたる墓なりと絶叫し玉ひし言語は實に劇しく實に勇ましき限りである。と一か此一片の精神を倣ひ正義を以て立ち此の頹廢せる社會の状態を救ひたい。今日「ジョン、ブライイト」「ハリソン」「ガーフィールド」の如き又た彼の「マーステン」嬢が西比利亞に於て人の最も忌み嫌ふ癩病人の中を交はり妙齡の女子たる身を以て、此の不幸なる人々を救はんとする心膽は實に景慕すべし、此の如く只だ一の正義を以て確信を以て何事も行なふものは、吾がキリスト信徒の中を於

て之れを見る事が出来る。

帝國議會は開けた、人民の代表者は撰まれた、然るに悲む可きは堂々たる代議士中、或は賄賂を取つて説を枉げた、或は利録の爲めに名を賣つたとか聞くに忍びざることはかりである。文天祥や諸葛孔明、及び舊日本の武士は實に正義を持して居た。今日彼等の有様は如何であるか。英國又は政治家は「グラッドストーン」あり亞米利加又は「ハリソン」あり、彼等が其已を捨てて世を益せんことを謀るは何が爲めぞ、神を信するに基く、見ざる處なく聞かざる處なき神が照覽せりと思ふ、此の信仰が有る故に彼等は公明に正大に事を行なふて少しも譲らぬのである。此の一片の信仰が國民の心よ起るならば、以て正義の氣風を回復する事が出来る、不義賄賂の如きは跡を斷ち正義の光輝の顯はるゝ事が明らかである、吾人は是れを期するのみならず是を實行せんことを思ふ。偕て如何にして是れを行なふか、一方には基督教會及基督教主義の學校よりて益々人士の心を正義に導びく事、尤ども學校は此頃稍々外見上衰へて居る様に見ゆるが、能く視察すれば決してそでない何か一種の勢力ありて存するを見る。私は基督教の効用を云はぬ、云はぬ

は云ふに愈まざる私は只だ演説をした計りで無く實に之を行なふことを期するものである。

我が基督教は國家に對し王室に對し人民に對し政府に對し前述の思想を抱持して居る、是れで私の意見を充分盡した。只だ一つ感情の爲めに制せらるゝが残念である、是の感情を取り除くは道理によりては不可只だ正義により信仰によりて之れを感化せなければならぬ、諸君の知人に若し惑を抱くものが有らば、願はくは今晚私が申した事によりて其惑を解かれんことに力を盡して貰ひ度い。(拍手大喝采)

明治廿六年三月二十一日印刷
全 年 全 月 二十

二 日出版 (定價貳錢)

大阪江戸堀上通一丁目

演說者 宮 川 經 輝

岡山縣岡山市上西川町百八十一番邸

發行者 野 津 半

岡山縣岡山市門田屋敷五十六番邸

印刷者 林 崎 將 太 郎

岡山市上西川町百八十一番邸

發行所 復 生 堂

岡山市門田屋敷貳百三番邸

印刷所 岡山孤兒院活版部

賣捌所 復生堂

大坂土佐堀
三丁目

大坂福音社

東京市京橋區
出雲町一番地 警醒社書店

15-92